



今年3月11日、東日本大震災という未曾有の大災害が起こりました。被害状況などはテレビなどのメディアを通じてその大きさを逐次知ることができましたが、現地で大津波の爪跡を目の当たりにした時には言葉を失いました。

一言で言うと、町が消滅している状態で、家のコンクリートの基礎だけが一面に残っている光景でした。

現地で震災復旧支援活動をした際に、宮城県庁や仙台市、

関係機関にヒアリングをさせていただったので、関係者からは忌憚(きたん)のない意見を聞くことができました。一番印象に残っているのが、NPOに対する評価が極めて低いことでした。行政の幹部からも「NPOが会議に入ってこなかったからうまく進んでいる」というような耳を疑うような発言も聞きました。同じく、同様の意見を複数の関係者から聞いたことにNPOに携わるものとしてはショック

が、NPOに対する評価が極めて低いことでした。行政の幹部からも「NPOが会議に入ってこなかったからうまく進んでいる」というような耳を疑うような発言も聞きました。同じく、同様の意見を複数の関係者から聞いたことにNPOに携わるものとしてはショック

たいが、利害関係に執着するNPOも少なくなく、NPOを見極めにくいので警戒せざるを得ない」ということでした。これを聞いて、現在奈良県と一緒に進めているNPOの評価指標の必要性をあらためて感じました。この指標は平成23年度中には完成させてNPOの基盤強化に活用させていただきます。予定です。

支援物資の配布状況については8月末現在で支援物資が段ボールで数万ケース配布されずに残っているということも初めて知りました。

非常時におけるNPOと行政の協働⑤

役割分担で善意生かす

消防関係、自衛隊、NPO、ボランティアなどさまざまな立場の人から多様な意見を聞くことができました。

今回私が専攻している同じ大学院生仲間と構成している震災復興研究会という肩書で

クを隠しきれませんでした。

一方でボランティアの評価は非常に高かったのも印象的でした。

NPOについての見解をさらに求めると、「行政と接着剤になるNPOは大変ありが

原因はいくつかあります。その大きな一つが配布するためには数がそろわないと配布できないという公平・平等の原則でした。阪神淡路大震災の時も寒い中、寄付されたストープが上記と同様の理由で倉庫に眠ってしまった状態になっていたりと、パンが配布されずに賞味期限切れになるなど、多くの善意が無駄になった反省が未だに生かされていません。

ボランティアやNPOは公平・平等が原則ではありません。これを見かねたNPOのリーダーがお年寄りや子供を優先にパンを配布し、支援物資が生きた事例も多く報告されています。時と場合によっては、善意を無にしないためにも行政とNPOの役割分担も必要ではないでしょうか。

(社団法人まちづくり国際交流センター理事長)

毎月第2、第4、第5水曜日掲載



活動資金を獲得するために、ミツバチの蜜を収穫している環境NPOがある